

## トマス・アクィナスにおける esse と essentia について

小杉みどり

トマス・アクィナスの存在論において、最も基礎的かつ重要な概念は esse であろう。しかし、この esse については、5 世紀に既にポエチウスが存在論的意味を有する言葉として使った、との E・ジルソンの指摘<sup>(1)</sup>に見られるように、ポエチウスは、一般に *De Hebdomadibus* として知られるローマ教会の助祭ヨハネに宛てた書簡の中で、「esse と id quod est は異なる<sup>(2)</sup>」と述べて、esse を id quod est と対立する概念として導入している。トマスは独自の観点から、ポエチウスの esse と id quod est に関する一連の理論に註釈を施し、これを介して彼特有の存在論を展開したように思われる。以下、両者のテキストに見られる esse と id quod est の概念を手掛かりとし、トマスの取った存在論的立場を明らかにしたいと思う。

ポエチウスは *De Hebdomadibus* 1311 において、esse について次の四つの特徴を挙げている。esse は、(1)それ自身はまだ存在していない、(2)いかなる仕方でも何かを分有することはない、(3)或るものは esse を受け取った時に存在する、(4)それは自己以外のどんな他のものとも混合することはない。他方 id quod est については、彼は次のように述べている。それは、(1)存在の形相 (essendi forma) を受け取って存在しかつ自存する、(2)或るものを分有できる、(3)自身であること以外に何かを所有することができる。以上のような esse と id quod est の特徴をまとめてみれば、次のようになるであろう。esse はそれ自体では存在しないが、id quod est に受け取られた時にそれを存在せしめる働きをなし、他方 id quod est は esse や偶有の基体である個々の実体的存在者である<sup>(3)</sup>。従って、このテキストに見られる限り、「存在の形相を受け取ること」と「esse を分有すること」とは同じことを意味すると思われる。即ち、esse は id quod est の存在の原因であると共に又その形相的部分でもあるということである<sup>(4)</sup>。

ところで、トマスはボエチウスの以上の論述について次のように註釈している<sup>(5)</sup>。即ち、ボエチウスは前掲箇所<sup>(5)</sup>で事物 (res) について言及したのではなく、esse と id quod est の概念 (ratio vel intentio) を分析したのである、と彼は主張し、次のように述べる。esse は「存在すること」という抽象的概念であるから、自らの中に異質なものを所有したり、何かを分有することは不可能である。又反対に、id quod est は「存在している」という具体的概念であるから、異質なものと結合が可能である。それ故、esse を分有し、しかもこの存在の現実態 (actus essendi) を分有する限りにおいてそれは存在すると言われ、esse の基体 (subiectum essendi) として示される。ここではトマスは、esse を存在の現実態、id quod est をそれに与かるものとして捉えているが、彼とボエチウス<sup>(5)</sup>の間の相違が明らかになって来るのは、esse と id quod est が存在者においてどのように見出されるかという問題に関してである。

この問題に関してボエチウスは、(1)単純者は自己の esse と id quod est を一つのものとして所有するが、(2)合成体においては esse とそれ自身あることは異なる、と述べている<sup>(6)</sup>。このことの意味は、(1)単純者、即ち神的実体は質料なしに形相のみから成るものであるから、それ自身 (=id quod est) とその形相 (=esse) とは等しいけれども、(2)合成体、即ち被造実体は、形相のみならず質料もその部分として持ち、又この質料的部分のために諸偶性をも受け取って、それらとの結合によって全体的に一つの存在者として表わされるのであるから、形相的部分のみを示す esse とは当然区別される<sup>(8)</sup>、ということである。即ち、ボエチウスにおいては、存在者は二様の在り方を示し、その区別の基準となるものは、各々の実体が形相のみから成るか、それとも形相とその他のものとの合成によるかということである。この区別は存在者の本質構成からする区別と言えよう。しかしながら、esse は形相であるばかりでなく、存在の原因としても捉えられていたから、ここに本質と存在という二つの次元の混在が認められるように思われる。

ところでトマスの註釈によれば、esse と id quod est が事物に適用される時、両者の関わり方によって存在者には三様の区別が見出されることになる<sup>(9)</sup>。まず、単純者には、(1) esse と id quod est が実在的に (realiter) 同一でかつ概念に従って (secundum intentionem) のみ異なる真に単純 (vere simplex) であるものと、(2)或る種の合成を免れているという意味で単純であるものがある。第二の単純者は真なる

単純者とは言えない。というのも、単純形相といえども質料を欠くという意味で単純ではあるが、それ自体 esse ではなく、かえって esse を限定するものであって、esse を所有することによって存在するからである。それ故にこの種の単純者においては esse と id quod est は<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>実在的に異なる。他方(3)形相と質料から成る合成体があるとして、これにおいても又 esse と id quod est は<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>実在的に異なる、とされる。ここで注目しなければならないのは、トマスが存在者に三様の在り方を認めたことに加えて、ポエチウスのテキストでは見出されなかった新しい表現、即ち、esse と id quod est が<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>概念に従って異なるとか、<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>実在的に同一である又は異なる、という表現を駆使していることである。

まず、トマスにおける存在者の三様の存り方を検討してみよう。彼は第一に、esse と id quod est が実在的に同一であるため esse を分有しない存在者と、esse と id quod est が実在的に異なるため esse を分有する存在者とを区別する。第二に、後者のうちに、質料を持たない存在者と、質料との合成によってある存在者とを区別する。ここから、トマスは存在者を、二つの規準、即ち、第一に esse を分有するかしないかということ、第二に esse を分有するものの本質構成、という二つの規準によって区分したことが分かる。これに従えば、(1)真なる単純者とは、esse と本質が互いに区別されないという意味において同一、単純である唯一の存在者、即ち神である。又(2)本質構成上は単純であるが、esse を分有し esse との合成によって存在する天使的存在者があり、更に(3)本質の内的構成上形相・質料の二原理を必要とし、かつ esse を分有し esse との合成によって存在する二重の意味での合成体、いわゆる可感的事物の類があることになる。

次に、esse と id quod est が実在的に同一である、又は異なる、とトマスが述べたことの意味を検討してみよう。即ち、第一に、神においてのみ認められるような esse と id quod est の実在的同一性がある。これは、換言すれば、存在すること自体が本質に他ならないことである。つまり、この「存在する」という本質が他の何ものによっても限界付けられることがないから、それは自らにおいて自らによって完全に現実態化されている。しかし、実在的に同一であっても、この esse と id quod est はやはり異なった概念であるので、神の場合ですらそれらは区別して知性認識されうる。従って、神においては esse と id quod est は実在的に同一であるが、

概念的には区別して考えられることができる、とされたのである。他方、単純形相と合成体において *esse* と *id quod est* が実在的に異なるのは、単純形相であれ合成体であれ、各々は固有の本質を自らのうちに具現して或る統一体 (*unum*) として存在しているが、存在を自己原因することは決してなく、*esse* を分有し *esse* と自らの本質との合成によって、即ち *esse* を自らの本質によって限定して存在するからである。それ故、*esse* と *id quod est* は決して二つの異なった事物として区別を受けるのではなく、ただ実在の統一体である事物のうちに二つの異なった構成要素としての実在の区別を受けるのでなくてはならない。即ち、*esse* と *id quod est* は、一方は存在の原因を、他方は本質構造を示すのである。

以上から、トマスは、ボエチウスにおいて存在と本質の二次元が混在した *esse* の概念からその存在作用のみを抽出した、と考えることができるであろう。このことによって彼は更に、*id quod est* にもボエチウスとは異なった役割を与えることになったと考えられる。即ち、ボエチウスがそれを存在者と捉えたのに反し、トマスは存在者の本質構造の面から捉えて行ったのである。彼は先に、*id quod est* は存在の基体として示される、と註釈したが、そのことは、*id quod est* が存在の直接の基体として具体的存在者になることを示すよりは、むしろ存在の現実態としての *esse* に関して可能態においてあることを示唆する一段階であったと思われる。こうしてトマスの他のテキストでは、*esse* と *id quod est* の対概念はしばしば *esse* と *essentia* の言葉で言い換えられるに至った、と考えられる。<sup>(10)</sup>

そこで、次に示したいのは、トマスが彼に特有な *esse* と *essentia* の対概念を確立するに至った三段階の過程である。<sup>(11)</sup> まず、例えばフェニックスのように、存在するかしないかを知らなくても、それがどのようなものであるかを我々は知解できる場合がある。故に、ものの存在が知られなくてもその本質は知解可能である。この限り、*esse* と *essentia* は別のものとして考えられる。これが第一の段階である。しかし、存在そのものを自らの本質とする存在者においては、*esse* と *essentia* は当然同一である。しかもこのような存在者は唯一、第一のものでなければならない。このような存在者はあらゆる多数化を排除するからである。即ち、もしそれが(a)種差の付加による多数化を受け取るとするなら、それはもはや存在そのものでなく、加えられた種々な形相によって種々な何ものであることになってしまうだろう。又(b)質

料の付加による多数化を受け取るとするなら、同一種のうちに多くの個体が生じ、個体の各々は質料的存在者としてもはや自存できないものであるから、これは不合理である。又(c)絶対的なものが他の何らかのものに受け取られる仕方でも多数化が生じるとすれば、相対的存在者がそこから結果し、当然そこでは絶対者は存在そのものであることはできないからである。以上から、esse と essentia が同一であるような存在者は唯一であり、その他全ての存在者においては esse と essentia は異なると結論することができる。これが第二の段階である。最後に、或るものに何かが生じたとして、この生成はこの或るものの自己原因によるか、即ちそれ自身の本性の原理 (principium naturae suae) から原因されたか、それとも他者原因、即ち自己の外部の原理 (principium extrinsecum) に依拠したものであるかのどちらかであろう。そこで、事物に生じた esse について同じように考えてみると、事物は存在することそのものを自己の本姓としていないから、その esse を自己原因することは決してなく、従ってそれは外部の原理に依拠すると考えなければならない。しかも存在原因の無限遡及は不可能である。故に、存在すること自体を自己の本姓として、自らによって存る一者を、存在の第一原因としなければならない。以上から、esse と essentia が異なる存在者においては、その esse はその本姓外の原理であって、essentia という自己の本姓の原理とは区別される、と考えることができる。更にこの場合、他者から何か或るものを受容するものはその他者に対して可能態においてあり、又受け取られたものは受け取ったものの現実態となる、と言われるところから、esse と essentia が異なる存在者は、esse をそれから受け取る存在の第一原因に対しては可能態においてあり、又 esse を受け取って現に存在する限りにおいて現実態においてある、と結論される。

さて、以上の三段階を検討してみると、(1)まずトマスは我々の知性認識を分析した結果、事物の本質認識と実存判断は異なることを見出した。これは、トマスが第一に esse と essentia を認識上区別されるものとして導入した、ということである。(2)次にトマスは、神的存在者の概念を次のように分析した。即ち esse 自体は他者による付加も分有も排除するので、自己以外に依拠することなく、全てのものに先立って自己をその存在の原因とする。esse 自体である存在者を我々は神と呼び、神においてのみ無限定で不可分で完全な esse を見出すところから、トマスは、神

の esse と essentia が実在的に同一であることを導入した。他方、神的存在者以外の全ての存在者においては、その esse は各々の付加や分有の様式に応じて限定されることになる。即ち、esse と essentia がここでは実在的に異なるわけで、essentia は esse を限定する様式となり、その様式に応じてこれら存在者のうちに多様性が生じる、と考えられていたことが分かる。(3)最後に、被造的存在者の本性が分析された。即ち、存在すること自体が決して自らの本質にならない存在者は、一方自己の本質に関しては現実的に決定する要因を自己のうちに所有するが、他方その存在については自己の本質外の原理に依拠しなければならない。ここから、自己の本質上の原理である essentia と、存在の能動因である esse とは、共に原理として異なることを、トマスは結論したのである。しかも、esse と essentia は存在に関する限り、一方原因、他方被原因として区別されるので、各々現実態と可能態という形而上学的原理に還元されたのである。<sup>(12)</sup>

さて、以上のように esse と essentia が確立されたならば、esse はたとえ essentia の外部にあるとしても、一般の偶有とは区別されなければならないのは当然である。<sup>(13)</sup> 偶有は基体の先行を必要とし、又基体の存在は偶有の有無に関わりなく成立するのであるから、偶有は、あらゆるものに先立ち、あらゆるものの存在を決定する esse とは全く異なるものであるからである。<sup>(14)</sup>

又、esse と essentia がたとえ各々別個の原理であるとしても、このことは、別個のものが別個の原理によって、別個の起源から完成されることを意味しない。一般に現実態とは可能態がそれへと帰着するもの、可能態を完成に導くものである。それ故、或るものを他のものへ変化させるのではなく、潜在しているものを顕在化させるものである。従って、esse も又存在に関して潜在的な essentia を顕在化させる。この時、被造存在者は決して esse 自体になることはなく、ただ essentia によって限定された esse を所有するに過ぎない。しかし又、そのことは essentia の限定によって esse が質的に変わることもない。esse は被造物の本質の外的機動因ではあるが、そうであると共にその本質の内的原理たる essentia を現実態化せしめ、それを内的に支えている。ここでは、esse と essentia は、一方能動的、他方受動的な原理として相補的に協働し、統一体としての事物を完成しているのである。

そこで、統一体としての事物の側から esse と essentia がどのように分析される

のかを見てみたい。これは、*Quaestiones Quodlibetales* L. 2, Q. 2, a. 2 におけるトマスの *suppositum* と *natura* についての考察のうちに見出すことができる<sup>(15)</sup>。即ち、トマスによれば、本性 (*natura*) は *essentia* とほぼ同義で、定義が示すもの、即ち種概念 (*ratio speciei*) であり、その種概念が示す以外のどんなものも含まない。*esse* は種概念ではないから、*essentia* に内属することは認められない。一方、基体 (*suppositum*) は第一実体 (*substantia prima*)、即ち実体範疇における個体 (*singulare in genere substantiae*) を意味する。それ故、基体は種概念に属するもののみならず、それに生ずる (*accidere*) 種々の偶有をも受容し、それら全てを以て或る統一体としてあることができる。従って *esse* も基体に属する (*pertinere*) ののである、と結論される。つまり、基体はそこに *esse* が生じることによって、或る *essentia* が現実態化され、その上で偶有が受容され、個々の具体的な存在者となるが、他方、*esse*, *essentia*, 偶有は基体のうちに成立する存在者にとって欠くことのできない諸要素である。従って、*esse* を分有する存在者においては、基体は構成されるもの (*constitutum*) であり、*esse*, *essentia*, 偶有は構成するもの (*constituens*) であるとして互いに区別されることになる。しかし神においては、その基体は部分を持つことも合成されることもなく全的に *esse* が現実態化されているから、基体はその *essentia* と全く同一であることが指摘される。この考察を通してトマスは、*esse* は *essentia* に内含されるものではないこと、*esse* も *essentia* もそれだけでは現実の存在者として認められないこと、基体においてそれらが働き合った時にのみそこに或る事物が存在するのであること、を表明したのである。

以上述べられたことから、トマスは *esse* と *essentia* について (1) 認識上区別できるものであること、(2) 神を除く全ての存在者においては実在的に区別されること、(3) 存在の現実態、可能態という形而上学的原理の区別に還元されること、を確立したといえよう。後世、哲學家はこれをトマスの *esse* と *essentia* に関する実在的区別 (*distinctio realis*) と呼んでいる。ところで私は、先に述べた基体概念が以上のようなトマス存在論の性格をよく表明するものとして評価したい。なぜなら、もしトマスがいわゆる物理的区別 (*distinctio physica*)<sup>(16)</sup> を採用し、*esse* と *essentia* を二つの異なる実在的事物として考えたとするなら、*esse* と *essentia* がそこにおいて生じると言われた基体たる存在者を設定する必要はなかったであろうし、又もしそれに

もかかわらず設定したとするなら、基体はそれらとは異なる第三の事物となっただろうからである。更に、もしトマスがいわゆる概念的区別 (*distinctio rationis*) の立場<sup>(17)</sup>を取り、*esse* と *essentia* は単に主観的操作による概念的産物にすぎないとするならば、この場合も基体という現実の存在者を設定し、存在者のうちにその根拠を求める必要はなく、又もし仮に設定したとしてもそれらの原理で以て基体の実在的構造を説明する必要もなかったであろうからである。以上のように考察される限り、トマスの *esse* と *essentia* の実在的区別にとって、この基体の設定は極めて有効かつ必然的であった、と考えることができるであろう。

### 註

- (1) E. Gilson: *L'être et l'essence*, Paris, 1972, p. 14.
- (2) *De Hebdomadibus*, Migne, Paris, 1882-91, 1311-B.
- (3) ボエチウスの *esse* 及び *id quod est* に関する解釈は様々である。*esse* は動詞的な存在の働きを示し、*id quod est* は名詞的な実体を示すと解する見方 (cf. E. Gilson: *L'être et l'essence*, p. 14 及び p. 339), 又 *esse* を形相、*id quod est* を第一実体と解する見方 (cf. Roland-Gosselin: *Le "De Ente et Essentia" De S. Thomas d'Aquin*, Paris, 1948, pp. 142~145), *esse* 及び *id quod est* を各々実存及び本質と解する見方 (cf. 松本正夫: 『西洋哲学史』慶応通信, 1971, pp. 282~283) などが挙げられる。
- (4) これは、*De Trinitate* 1250-B~D に見られるボエチウスの *esse* への言及からも又結論できる。即ち、ボエチウスは銅像の例を取って、銅像は質料である銅によってではなくそこに刻まれた形相によって像であると言われ、その銅も質料である土の故にではなく銅という形相の故に銅と言われ、更に土自体ですらその形相である乾きと重さに従って土であると言われる、それ故 *esse* も質料に従ってでなく固有の形相に従ってと言われる、即ち形相が *esse* 自体であり、*esse* は形相から由来する、としているからである。
- (5) *In librum Boetii de Hebdomadibus*, Marietti, Roma, 1954. L. 2-19~30.
- (6) *De Hebd.* 1311,C.
- (7) cf. *De Trinitate* 1250,C.
- (8) cf. *ibid.* C~D.
- (9) *In librum Boetii de Hebd.* L. 2-31 以下。
- (10) *De Ente et Essentia*, Marietti, Roma, 1954, C. 4-28.
- (11) *ibid.* C. 4-26~28.



- (12) esse と essentia が現実態・可能態原理に還元されることについては, *Sent.* L. 1, D. 8, Q. 2, a. 2; *Quodl.* L. 2, Q. 8, a. 1; *ibid.* L. 7, Q. 3, a. 2; *ibid.* L. 9, Q. 4, a. 1; *De Subs. Separ.* C. 8, etc. 参照。
- (13) cf. *De Ente et Essentia*, C. 6-35.
- (14) cf. *Quaestiones Quodlibetales*, Marietti, Roma, 1956, L. 2, Q. 2, a. 1.
- (15) 基体概念には従来様々な意味が認められている。例えば、それは論理的・文法的な主語という意味も持つし、更に一般に「基にあるもの」との意味から、偶性に対して様々な現象の基体と解される場合、又形相に対して生成消滅の質料的基体と解される場合もある。しかしここでは、トマスは, *suppositum* をあらたに esse の場で捉え直す試みをしている、と考えられる。トマスにおける基体概念の様々な意味、関連、相違等については今後の研究課題として考えてゆきたい。
- (16) エギディウス・ロマヌスに代表される説 (コプルストン: 『中世哲学史』 箕輪・柏木訳, 1970, p. 499, 及び W. Carlo: *The Ultimate Reducibility of Essence to Existence in Existential Metaphysics*, The Hague, 1966, pp. 18~86 参照)。
- (17) ガンのヘンリクス (コプルストン: 『中世哲学史』 pp. 503~512, 及び W. Carlo: *op. cit.* pp. 14~17 参照), フランシスコ・スアレス (田口啓子: 『スアレス形而上学の研究』 1977, pp. 74~84 参照) 等に代表される説。